

## 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の活用 (高校生用)

河村 茂雄\*

(1999年10月29日受理)

### I はじめに

「公・私立高等学校における中途退学者数等の状況」(文部省, 1997)の報告では, 高校生の中退率は調査を始めた1982年以来最高の2.6%になった。不適応の内訳は, 「学校生活・学業不適応」「人間関係がうまく保てない」「学業不振」「授業に興味があかない」「もともと高校生活に熱意がない」などがあげられている。中途退学をした高校生の不適応感は, 学習を含めた学校生活のいろいろな面でもたらされている。したがって, 高校生の学校生活への適応に関して計画的な援助を考えたとき, 生徒個人の援助ニーズのレベルと必要な領域を把握することが必要になる。

### II 問題と目的

河村(1999a)は高校生の適応に関する援助ニーズの段階を把握する尺度を作成した。それは, 石隈(1996)の指摘をもとに, 「すべての生徒」がもつ援助ニーズに対応する『一次的教育援助』, 「一部の生徒」つまり特別の配慮を必要とする生徒への援助である『二次的教育援助』, 「特定の生徒」つまり特別な援助が個別になされる必要がある生徒への援助である『三次的教育援助』の三段階で, 生徒の援助ニーズを把握しようとするものである。そして, 被調査者の75%の生徒が二次的教育援助が必要な状態であることを指摘し, 教師の具体的な援助が必要であることを示唆している。

松山・倉智(1969)は学校生活での生徒の行動がスクール・モラル(School Morale)と関係していることを指摘した。スクール・モラルとは, 学校の集団生活ないし諸活動に対する帰属度, 満足度, 依存度などを要因とする児童・生徒の個人的・主観的な心理状態である。したがって, 生徒のスクール・モラルは学校生活への適応の指標になるものである。そして, 松山ら(1969)は中学生のスクール・モラルを規定する要因として, 学校への関心, 級友との関係, 学習への意欲, 教師への態度, テストへの反応, 進路への見通し, の6つがあることを指摘している。河村(1999b)は中学生の援助ニーズの段階を把握した後, 具体的な援助を必要とする領域を把握するスクール・モラル尺度(School Morale Scale: SMS: 中学校用)を開発した。これは学校生活への満足感や充実感を感じる内容を領域別に実態調査をして整理し, それについて中学生約5000人の回答結果をもとに作成されたものである。具体的には, ①

\* 岩手大学教育学部

学校への関心, ②級友との関係, ③学習への意欲, ④教師との関係, ⑤テストへの反応, ⑥進路意識, ⑦規則への態度, ⑧特別活動への態度, ⑨その他, の9つがスクール・モラルを規定する領域として想定され, 分析の結果, 「友人との関係」「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」の5つが特定されたものである。なお, 全生徒に対して放課後の部活動への取り組みを強く奨励している一部の地域では, 「部活動との関係」の因子が特定されている。さらに, スクール・モラル尺度(中学校用)は, 河村(1999b)が作成した中学生の適応に関する援助ニーズの段階を把握する学級生活満足度尺度の結果とも, 高い相関があることが確認されている。

同様に, 高校生の学校生活への適応に関して計画的な援助を考えたとき, 生徒の援助ニーズの段階を把握し, かつ, 援助が必要な領域を明らかにできれば教師はより効果的な対応が実施できると思われる。したがって, 本研究は河村(1999a)が作成した生徒の援助ニーズの段階を把握する「学校生活満足度尺度(高校生用)」に対応し, 生徒個々の援助ニーズが求められる分野を発見できる尺度として, 河村(1999b)が作成した「スクール・モラル尺度(中学校用)」が高校生にも活用が可能かを検討することが目的であった。

本研究は2段階のプロセスを通して実施された。研究1は, 河村(1999b)が作成した「スクール・モラル尺度(中学校用)」が高校生にも活用が可能か, 実態調査を実施し検討することである。研究2は, 研究1で確認されたことに基づいて, 高校生版として標準化する試みと信頼性の検討である。

### Ⅲ 方法と結果

#### [研究1]

##### [目的]

河村(1999b)が作成した「スクール・モラル尺度(中学校用)」が高校生にも活用が可能か, 実態調査を実施し検討する。

##### [方法]

**調査対象** 関東圏の公立高校の担任教師6人と担任する6学級の高校生235人が対象であった。対象はA大学大学院で長期研修をしていた高校の教師と, 彼等が担任している学級の生徒であった。

**調査時期と手続き** 1998年6月, 調査対象の高校生に「学校生活満足度尺度(高校生用)」(河村, 1999a, 表1)と「スクール・モラル尺度(中学校用)」(河村, 1999b, 表2)を実施した。その結果をもとに担任教師に聞き取り面接を実施してもらい, 教師の日常観察も含めて, 尺度結果の妥当性を5件法(5:とても当てはまる, 4:やや当てはまる, 3:どちらともいえない, 2:あまり当てはまらない, 1:全く当てはまらない)で生徒一人一人について教師に回答してもらった。さらに, 信頼性の検討のため高瀬・内藤・浅川・古川(1986)の作成した「学校生活適応感尺度(高校生版)」も同時に回答してもらった。

##### [結果]

有効回答者数は226人(有効回答率:96.2%)で, 内訳は1年生79人, 2年生72人, 3年生75人であった。「スクール・モラル尺度(SMS:中学校用)」の5つの下位領域ごとに合計点を集計した。そして, 各領域の合計点と領域内の各項目の得点についてIT相関係数を求め

表1 学校生活満足度尺度（高校生）の質問項目

質	問	項	目
・私は勉強や運動、特技やひょうきんさなどで友人から認められていると思う			
・私はクラスの中で存在感があると思う			
・私はクラスやクラブの活動でリーダーシップをとることがある			
・仲のよいグループの中では中心的なメンバーである			
・私は学校・クラスでみんなから注目されるような経験をしたことがある			
・学校生活で充実感や満足感を覚えることがある			
・私はクラスで行う活動には積極的に取り組んでいる			
・学校内で私を認めてくれる先生がいると思う			
・在籍している学校に満足している			
・学校内に自分の本音や悩みを話せる友人がいる			
・私はクラスの人から無視されるようなことがある			
・私はクラスメートから、耐えられない悪ふざけをされることがある			
・私はクラスや部活でからかわれたりバカにされるようなことがある			
・私は授業中に発言をしたり先生の質問に答えたりするとき、冷やかされることがある			
・私はクラブなどの仲間から無視されることがある			
・クラスで班をつくるときなど、なかなか班に入れず残ってしまうことがある			
・私はクラスの中で、孤立感を覚えることがある			
・私はクラスの中で浮いていると感じることがある			
・私は休み時間などに、ひとりでいることが多い			
・私はクラスにいるときや部活をしているとき、まわりの目が気になって不安や緊張をおぼえることがある			

たところ、 $r = .40$  未満の項目は5領域のすべてで抽出されなかった。したがって、領域ごとの質問項目には高校生が対象でも共通性があることが明らかになった。

SMSの5つの領域ごとの得点を説明変数にし、「学校生活満足度尺度（高校生用）」から集計された承認得点、被侵害・不適応得点をそれぞれ従属変数にして重回帰分析を行った。その結果、5つの因子の得点はすべて承認得点の正の予測子 ( $R^2 = .483$ ) であり、被侵害・不適応得点に対してはすべての領域で有意な負の予測子 ( $R^2 = .212$ ) であることが示唆された。承認得点は学校や学級内での存在や活動が認められていると自己認知している度合いで、この得点が高い場合は意欲的な行動につながると考えられる。被侵害・不適応得点は学校や学級に対する不適応感、いじめ被害・トラブルの大きさを自己認知している度合いで、この得点が高い場合は不適応行動に至る可能性があると考えられる。以上から、SMSは高校生の援助ニーズのレベルに関係があり、その援助が求められる領域の指標になることが示唆された。また、「学校生活適応感尺度（高校生版）」の各領域の合計点とSMSの5領域の合計点との間にも高い相関 ( $r = .71$ ) が認められ、SMSの妥当性が確認されたと判断された。

教師6人が実施したSMSの結果に基づく個別聞き取り調査の結果、尺度との妥当性の判断では、高校生226人に対して平均値：4.24、標準偏差：.73で、高い妥当性があると判断された。

したがって、「スクール・モラル尺度」は、中学生のみならず高校生を対象としても、生徒個々の援助が必要な領域を推測することが可能なことが示唆された。「スクール・モラル尺度」は「友人との関係」「学習意欲」「教師との関係」「学級との関係」「進路意識」の5つの下

表2 スクール・モラル尺度の質問項目

質 問 項 目
<p><b>友人との関係</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級内には、いろいろな活動やおしゃべりにさそってくれる友人がいる</li> <li>・学校内に気軽に話せる友人がいる</li> <li>・人と仲良くしたり友人関係をよくする方法を知っている</li> <li>・友人とのつきあいは自分の成長にとって大切だと思う</li> </ul> <p><b>学習意欲</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる</li> <li>・学校の勉強の中で、得意な教科や好きな教科がある</li> <li>・授業の内容は理解できている</li> <li>・学習内容をより理解するための、自分なりの学習の仕方がある</li> </ul> <p><b>教師との関係</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校内に自分の悩みを相談できる先生がいる</li> <li>・学校内には気軽によく話をする先生がいる</li> <li>・担任の先生とはうまくいっていると思う</li> <li>・先生の前でも自分らしくふるまっている</li> </ul> <p><b>学級との関係</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のクラスは仲のよいクラスだと思う</li> <li>・クラスの中にいると、ホッとしたり、明るい気分になる</li> <li>・クラスで行事に参加したり、活動するのは楽しい</li> <li>・自分もクラスの活動に貢献していると思う</li> </ul> <p><b>進路意識</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・私にはなりたい職業や興味のある職業がある</li> <li>・私は自分の将来や夢に希望をもっている</li> <li>・自分の進みたい職業の分野については自分から調べている</li> <li>・進路について仲のよい友人などと話し合うことがある</li> </ul>
<p><b>部活動との関係</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・部活には自主的に参加している</li> <li>・所属している部は仲のよい楽しい集団である</li> <li>・所属している部は希望していた部である</li> <li>・自分は部活の中で存在感があると思う</li> </ul>

㊦ 部活動との関係は特定の地域のみ特定された領域である

位尺度からなる5件法の尺度で、各下位尺度の得点分布範囲は4点から20点である。得点が高いほどその領域のモラルが高いと判断される。

なお、聞き取り調査を実施した6人の教師との検討時、中学生用と同様に、部活動への学校側の取り組みませ方に学校差や地域差があることが指摘され、今後の課題として残された。また、生徒にとって在籍する高校が受験の際の第一志望の学校か否かによって、スクール・モラルにも影響がある可能性が指摘された。しかしこれは、高校生の援助ニーズの段階を把握する場合には重要であるが、入学後に教師が学校生活場面において援助する領域を把握する上では、

問題は少ないと判断された。つまり、それによるモラルの低下は、その領域の得点に反映されると考えられるからである。

## [研究2]

### [目的]

「スクール・モラル尺度」を高校生を対象として標準化するとともに、信頼性の検討を行う。

### [方法]

**調査対象** 1都6県の高校生が対象であった。調査対象はA大学大学院に内地留学していた現職の教師の学校の生徒と、その教師が勤務している地区の他校の生徒であった。その際、高校の学力レベル、普通科と職業科という校種、共学および男子校・女子校など、対象とした高校が特定のカテゴリーに偏らないように配慮した。

**調査時期と手続き** 調査時期は1998年7月であった。調査協力を得た教師に本尺度と「学校生活満足度尺度（高校生用）」（河村，1999a）を郵送し、生徒に実施してもらい、回答後の本尺度を郵送してもらった。本尺度の実施に当たっては、本尺度が学校の成績に一切関係がないことを事前に説明してもらい、属性も学年と性別の記入のみにとどめた。なお、これらの調査は河村（1999a）の研究の一部と同時に実施された。また、本尺度の信頼性を確認するため、研究1で調査を実施した生徒に、1998年10月に再度本尺度を実施した。

### [結果]

調査対象は41校133学級の生徒5003人であった。内訳は1学年1691人、2学年1676人、3学年1636人であった。調査対象の全体および各カテゴリーごとの平均値および標準偏差は表3に記した。

**尺度得点の性差と学年差** カテゴリー間の得点の差を検討するために、t検定および分散分

表3-1 性別ごとの5つの領域の得点の平均値と標準偏差およびt値

	全体 (5003人)	男子 (2433)	女子 (2570)	t値 (df=5001)
友人との関係	16.15 (3.01)	15.66 (3.13)	16.63 (2.74)	14.44**
学習意欲	11.93 (3.55)	11.96 (3.64)	11.94 (3.48)	.156 n. s.
教師との関係	10.59 (3.81)	10.48 (3.74)	10.76 (3.88)	3.15**
学級との関係	13.37 (3.41)	13.20 (3.38)	13.54 (3.42)	4.21**
進路意識	14.09 (3.72)	14.07 (4.10)	14.10 (3.97)	.568 n. s.

( ) 内は標準偏差

\*\* :  $p < .01$

表3-2 学年別ごとの5つの領域の得点の平均値と標準偏差およびF値 (n=5003)

	1 学年 (1691 人)	2 学年 (1676 人)	3 学年 (1639 人)	F 値 自由度 (2,5000)	多重比較 (5%水準)
友人との関係	16.05 (2.95)	16.07 (3.10)	16.50 (2.91)	16.35**	3年>2年, 1年
学習意欲	11.93 (3.46)	11.81 (3.55)	12.01 (3.70)	2.07 n.s.	
教師との関係	10.23 (3.72)	10.46 (3.75)	11.27 (3.92)	48.63**	3年>2年>1年
学級との関係	13.11 (3.33)	13.22 (3.45)	13.77 (3.43)	14.63**	3年>2年, 1年
進路意識	14.16 (4.00)	13.88 (4.23)	14.29 (3.82)	10.57**	3年>1年>2年

( ) 内は標準偏差

\*\* :  $p < .01$ 

析を行った。分析結果は表3に合わせて記した。その結果、友達との関係、教師との関係、学級との関係に関して、有意 ( $p < .01$ ) に女子が高かった。学年差では学習意欲のみ有意な差が認められなかったが、他の4つの領域では有意な差が認められた。4領域とも3学年が1,2学年に対して有意 ( $p < .05$ ) に高いことが示唆された。したがって、教師が実際に生徒を理解する上で、性別、学年差に配慮する必要性が示唆された。

**尺度間の関係** SMSの5つの領域ごとの得点を説明変数にし、「学校生活満足度尺度(高校生用)」から集計された承認得点、被侵害・不適応得点をそれぞれ従属変数にして重回帰分析を行った(表4)。その結果、5つの因子の得点はすべて承認得点の正の予測子であり、被侵害・

表4 5つの因子の得点の承認得点、被侵害・不適応得点への重回帰分析結果

	承認得点	被侵害・不適応得点
・友人との関係	.363***	-.356***
・学習意欲	.178***	-.054***
・教師との関係	.302***	-.052***
・学級との関係	.310***	-.224***
・進路意識	.191***	-.056***
重相関係数	.695	.464
決定係数	.483	.215

\*\*\* :  $p < .001$

表5 4群ごとの5つの因子の得点の平均値と標準偏差および分散分析の結果（n=4682）

	学校生活満足群 (1175人)	非承認群 (1536人)	侵害行為認知群 (640人)	学校生活不満足群 (1652人)		
承認得点	36.96 (3.97)	24.69 (5.10)	36.22 (4.17)	24.05 (5.33)		
被侵害・不適応得点	15.08 (3.14)	15.65 (3.12)	26.80 (5.78)	27.10 (5.09)	F値	多重比較(5%水準)
友人との関係	18.23 (1.77)	16.09 (2.79)	16.70 (2.36)	14.43 (3.01)	816.197***	満>侵>非>不満
学習意欲	13.39 (3.31)	11.24 (3.53)	13.20 (3.06)	11.26 (3.43)	262.546***	満>侵>不満, 非
教師との関係	12.61 (3.77)	9.40 (3.30)	12.45 (3.73)	9.49 (3.37)	506.151***	満>侵>不満, 非
学級との関係	16.88 (2.27)	10.58 (2.69)	11.24 (3.58)	9.04 (2.72)	730.98***	満>侵>非>不満
進路意識	16.16 (3.41)	10.77 (3.97)	15.35 (3.65)	9.93 (4.32)	649.54***	満>侵>非, 不満

( )内は標準偏差

\*\*\*:  $p < .001$ 

不適応得点の有意な負の予測子であることが示唆された。

「学校生活満足度尺度（高校生用）」で高校生を4つのカテゴリーに分類した。一次的教育援助レベルである「学校生活満足群」と、二次的教育援助レベルである「非承認群」「侵害行為認知群」と、三次的教育援助レベルである「学校生活不満足群」である。そして、学校不適応の負の要因と考えられる友人との関係と学級との関係、教師との関係、進路意識の各得点について4群で分散分析を実施した（表5）。その結果、5つの領域すべてで4群間に差異が認められた。多重比較（ $p < .05$ ）をしたところすべての領域で、一次的教育援助レベル（学校生活満足群）>二次的教育援助レベル（侵害行為認知群, 非承認群）>三次的教育援助レベル（学校生活不満足群）であることが示唆された。したがって、援助レベルにスクール・モラル得点の高低も関係していることが確認された。

**SMSの信頼性** 研究1で調査対象となった生徒たちに行われた再検査の結果、友達との関係得点（ $r = .81$ ）、学習意欲得点（ $r = .89$ ）、教師との関係得点（ $r = .87$ ）、学級との関係得点（ $r = .82$ ）、進路意識得点（ $r = .85$ ）それぞれに高い相関が認められ、本尺度の信頼性が確認された。

〔考察〕

本研究結果からスクール・モラル尺度は、高校生の学校生活の適応感の領域別の指標になることが示唆された。したがって、援助ニーズの高い生徒には援助が求められる領域を把握することが、教師の具体的な対応の第一歩になると思われる。

友達との関係と学級との関係、つまり、対人関係と所属集団との関わりは、青年期である高校生にとって自我同一性の形成という発達課題の面からも重要な課題である。したがって、生徒の対人関係の形成・維持の仕方、学習の仕方、学級集団との関わり方のスキルを学習させるとともに、そのような場の設定を、授業やホームルームなどの諸活動の中に計画的に位置づけていくことが、教師の援助として必要になってくると思われる。それとともに、高校生は教師との関わりも、悩みが相談できる、気軽に話すことができる、本音で話すことができる等、より教師個人の人間性を重視していると思われる。教師役割だけの対応ではなく、一人の人間として関わる必要があるだろう。また、進路指導も単に進学・就職のためのガイダンスではなく、どのような人生を送りたいのかという生き方を問うような内容が求められるのではないか。それによって、自分の進む先が明確になり、日常の学習への意欲も高まるものと思われる。このような取り組みが、森田(1991)が指摘する生徒と学校をつなぐソーシャル・ボンドを強くし、中退者の減少に寄与すると思われる。

高校生の生活は学校生活だけではない。放課後の所属高校以外の友人関係やアルバイト、ボランティア活動、予備校への通学、そして今回は特定されなかった部活動との関わり等、義務教育の生徒に比較して生活は多様になっていることが考えられる。つまり、その分学校生活そのものが占める割合が低いのかもしれない。学校外の生活が主で学校生活が従になっている生徒もいることだろう。しかし、教師は自分の対応できる範囲で、より生徒にとって有効な援助を地道に続けていくことが求められるのである。そのとき援助ニーズのレベルと援助が望まれる領域を的確に把握することは、具体的に対応する上で大きな指針となると思われる。

最後に、高校生のスクール・モラルにおいて、各高校の学校差が著しいことが分析中に認められた。したがって、高校生の学校生活への適応の援助を考えた時、一つ一つの高校は、教師単位の援助を考える上で、まず自分の学校に入学してくる生徒の実態を把握し、学校体制での援助を計画的に行うことが必要であると思われる。

## 引用文献

- 石隈利紀 1996 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは カウンセリング研究, 29, 226-239.
- 河村茂雄 1999a 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度(高校生用)— 岩手大学教育学部年報, 59-1, 111-120.
- 河村茂雄 1999b 楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U (中学校用) 実施・解釈ハンドブック 図書文化
- 松山安雄・倉智佐一 1969 学級におけるスクール・モラルに関する研究(1) 大阪教育大学紀要第IV部門 18, 19-36.
- 文部省 1997 1997年度の「公・私立高等学校における中退退学者数等の状況」報告
- 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
- 高瀬克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 1986 青年期の環境移行と適応過程(1) 日本教育心理学会第28回大会発表論文集, 556-557.